

ハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn)

【選定理由】

本種は、流水産卵性サンショウウオで県内における生息域は狭い。生息している産地溪流や、その周辺の森林環境の悪化による個体群の減少が懸念され、近い将来絶滅危惧種に移行する可能性が考えられる。

【形態】

頭胴長 55～80 mm 程度の小型サンショウウオ。前肢は4本、後肢は5本の指を持つ。繁殖期には雌雄とも、指先に黒色の爪が出現し、オスの後肢第5趾の外側が肥大する。体色は紫褐色に茶褐色の縦条か斑点を持つ。本種は尾が長いのが特徴で、この特徴は特に雄に顕著に現れる。鋤骨歯列はM字型。

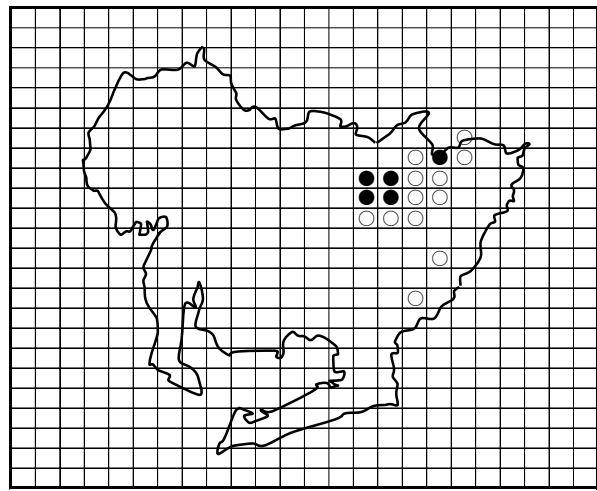


豊田市 (旧下山村), 2018年3月20日, 島田知彦 撮影

【分布の概要】

日本固有種。東北地方を除く本州の山地溪流に分布する。基準産地は神奈川県。県内では茶臼山、段戸山、寧比曾岳にかけての三河山地で、豊根村、設楽町、豊田市 (旧稲武町、旧足助町、旧下山村)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

山地溪流の源流部付近で産卵する。県下での分布標高は600～1,100m程度。繁殖期の知見は乏しく、他地域では5～8月と10～12月の年2回産卵する個体群が知られているが、愛知県内では未確認。産卵は水源近くの岩の割れ目の奥深くで行われるため、卵囊の発見は困難で、県下では旧稲武町における5月上旬の記録があるのみである(角田, 1963)。県下では幼生はヒガシヒダサンショウウオと同所的に生息することが多い。幼生は2年以上水中で生活し変態上陸する。

【現在の生息状況／減少の要因】

幼生の生息状況からみてヒガシヒダサンショウウオより少ないようである。ヒガシヒダサンショウウオの生息する場所で全く見られない河川もある。減少の原因としては天然林の減少や、林道工事による土砂の流入、砂防堰堤工事によるコンクリート打設に伴う水質変動等が考えられる。

【保全上の留意点】

他の溪流性サンショウウオと同様、生息地への土砂の流入や水質変動、森林伐採による乾燥化等による生息環境の変化に十分留意する必要がある。特に本種は、日本で唯一肺を持たない種類で呼吸の多くを皮膚に依存しているため、生息地の気温上昇や乾燥は致命的である。

【特記事項】

本種はYoshikawa et al. (2008) 等の一連の研究により細分化が進んだが、現在ハコネサンショウウオとして捉えられている集団の中にも比較的大きな遺伝的変異が知られており、さらなる検討が必要とされている。

【引用文献】

Yoshikawa, N., M. Matsui, K. Nishikawa, J.-B. Kim, and A. Kryukov, 2008. Phylogenetic relationships and biogeography of the Japanese clawed salamander, *Onychodactylus japonicus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its congener inferred from the mitochondrial cytochrome b gene. *Molecular Phylogenetics and Evolution* 49: 249-259.

角田 保, 1963. 矢作川流域の爬虫・両棲類, p.30-34. 名古屋女学院短期大学生生活科学研究所編. 矢作川の自然.

(島田知彦)